

# 論文

## マルクス経済表の研究

——「再生産論」の成立史面からの考察——

水谷謙治

はしがき

第一節 公開された諸表の概説

第二節 表の成立過程——「エピソード・再生産過程における貨幣の還流運動」を中心に——

第三節 表の叙述構想とその変更について

第四節 表成立の起点をめぐるこれまでの議論について（拙論批判への反論）

はしがき

いわゆるマルクスの経済表とは、彼がケネーの経済表に代えるものとして描いた資本家的総再生産過程の五つの表をさす。四つの図表は、一八六一年—一八六三年の経済学批判草稿のノート第二二冊（一八六三年五月—六月）において描かれており、最後の一つはエンゲルスあての手紙（同年七月六日付）で描かれている。いままでは最後の図表だけが知られていたが、このほど、ロシア語版『マル・エン全集』第四八卷<sup>1</sup>で他の四表が公開された（それらは、かつてノート第二二冊の表としてアドラツキー版『資本論』に紹介された表とは異っていた）。また、今日まで未公開だった「再生産過程における貨幣の還流運動」に関する論述（同ノート第一七冊—一八冊）も昨年公開された。さらに「再生産論」第一稿も近年公開されているし、第二稿の未公開部分もこのほど公開された。経済表や「再生産論」の形成史研究に不可欠な重要資料が、ほぼ出揃ったといつてよい。

本稿では、これらの資料をふまえて、経済表の内容・意図・成立過程・それが『資本論』で利用されなかった理由、等々を考察する。この考察は事実上、「再生産論」形成史研究の柱をなし、「再生産論」を始め『資本論』を十分に把握する基礎的作業の一つになるものである。

私はかつて（昭和四一年）「再生産論」の成立過程を考察し、経済表の成立に関する山田盛太郎氏の主張を批判したことがある<sup>2</sup>。以後、この問題について多少の議論が行われた。しかし私としては、前述の諸資料を欠いたまま議論をしてもさほどの成果は望めないだろうし、山田氏の誤りは再論するまでもなく明白だと考えたので、議論に参加しなかった。しかし右の諸資料が公開されたので、前記の諸課題を考察するなかで、かつての拙論の不十分さを反省し、同時に右の議論にもふれることにしたいと思う。なお、かつての論文との重複をさけるため重点を新しい諸資料

の検討におくつて了した。

(1) Маркс и Энгельс Сочинения Том48. 1980, Москва ロシヤ語版『マル・エン全集』第四八巻。

(2) 『再生産論』の成立について「立教経済学研究」第二〇巻第一、第二、第三号所収。以下、以前の拙論または『成立』という場合はすべて右の論文をさすことにする。

※本稿で用いられる略号は以下のとおり。

Gr. Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie. 日本語では『要綱』とする。

M. I ~ III. Theorien über den Mehrwert. M. E. W. 26-1 ~ III (日本語では『学説史』とする)。

K. I ~ III. Das Kapital. 以上の参照訳書はいずれも大月版からのものとする。

MEGA. Marx Engels Gesamtausgabe. 独ノ西研究所編の「新メガ」をさす。

## 第一節 公開された諸表の概説

### 一

経済表を含むノート第二三冊は、マルクスのページ付で一三四五―一四〇六ページからなり、彼の手で表紙に一八六三年五月と書かれている。

そこでは、(1)ペティ・(2)貨幣の資本への再転化・(3)再生産と蓄積・(4)本源的蓄積・等の考察が柱になっている。

(2)では、主として『資本論』第一部における蓄積論の前半の諸問題が論述されている。(3)では(2)を補うため

のいくつかの問題、たとえば再生産と蓄積の視点からみた可変資本・必要労働と剰余労働・剰余生産物・領有法則の転変・階級関係の再生産・貯金と蓄積の区分・その他の諸問題が扱われている。同じ(3)では「再生産論」に係わる蓄積条件の問題もごく簡単に言及されているが、そうした「再生産に関する詳細な規定は次篇で」行うこととされている(二三七一ページ。ロシア語版二二四ページ)。

問題の諸表は、この(3)において階級関係の再生産を論述した直後に、いわば挿入的に描かれている(二三九〇―一三九四)。表のすぐあとには(4)がきている。(4)に直続するノート第二三冊には六月と表記されているので、表が描かれたのは、五月から六月のある時までの一時期だということがわかる。

第一表から第三表が描かれたあとに、表について要旨つぎのような説明がある。

部門Ⅰ。(Klasse I)。不変資本(以下Cとする)は四〇〇に等しく、全部が再び生産物で現われる。この全生産物は消費元本に入る生活手段から成り、その一部分は部門Ⅰの消費元本に入る。可変資本(Vとする)は一〇〇に等しく、二〇〇の剰余価値(mとする)を生むものとする。一〇〇のVは労賃として貨幣で支払われ、労働者はこれと引換えにⅠの総生産物七〇〇から生産物一〇〇をうる。こうして貨幣が部門Ⅰの資本家に還流する。mは利潤として現れ、産業利潤、利子、地代に分裂する。それらは、利潤の一部が現物で補填される以外は貨幣で支払われる。それら収入の取得者は、生産物のうち二〇〇を獲得する。だから部門Ⅰの全生産物のうち三〇〇が消耗され、同時に貨幣が資本家に還流するので、彼らは再び賃銀、利子、地代を支払うことができる。総生産物の残り四〇〇は、同額のCを補填するのに必要である。

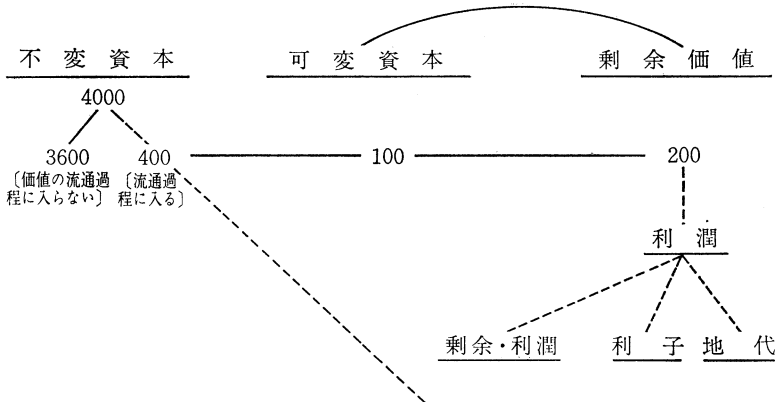
部門Ⅱ。全生産物が原料と機械からなる。V(133⅓)は労働者に労賃として支出され、彼らはこの貨幣と引換えに

〔X X II—1390〕〔再生産過程表(貨幣流通を除き不変な規模での再生産)〕

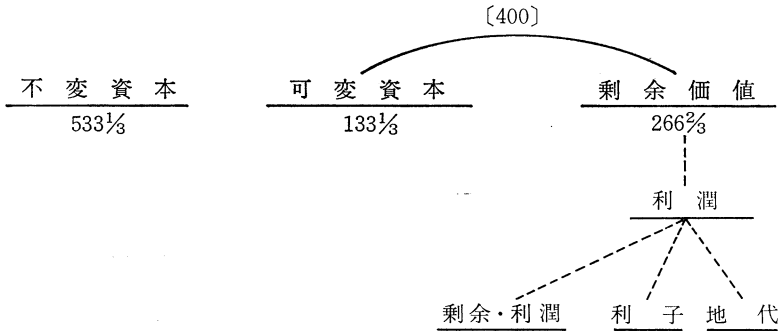
マルクス経済表の研究

〔 第 一 表 〕

I) 生活手段の生産



II) 不変資本の生産

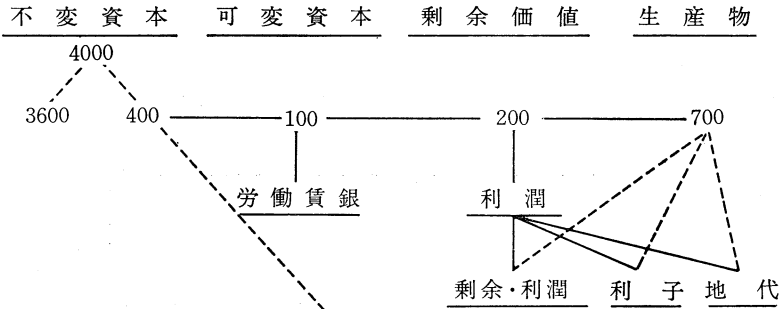


五

〔X X II—1391〕残りの不変資本(従ってここでは固定資本)部分は全く省略するこの部分は生産物に入らない。即ち、価値の流通過程には入らない〔XXII—1391〕

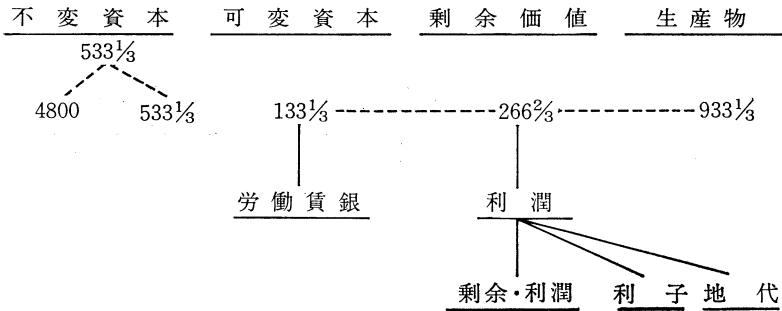
マルクス経済表の研究

I) 生活手段



II) 不変資本

[400]

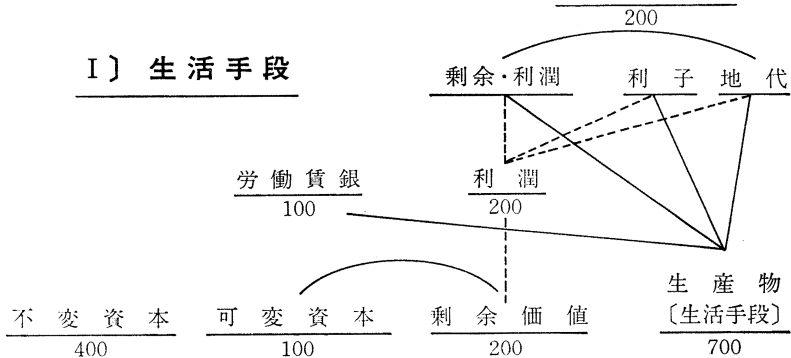


従って全体を総計すると

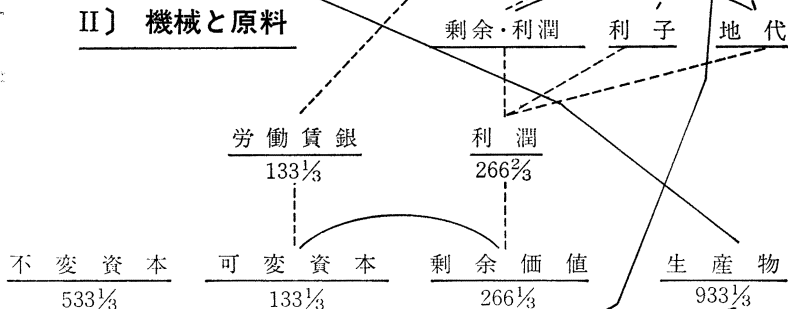
不変資本	可変資本	剰余価値	総生産物
933⅓	233⅓	466⅔	1633⅓

( 第三表 )

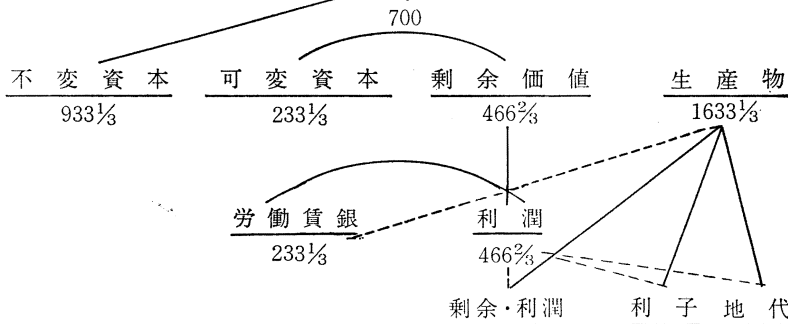
I) 生活手段



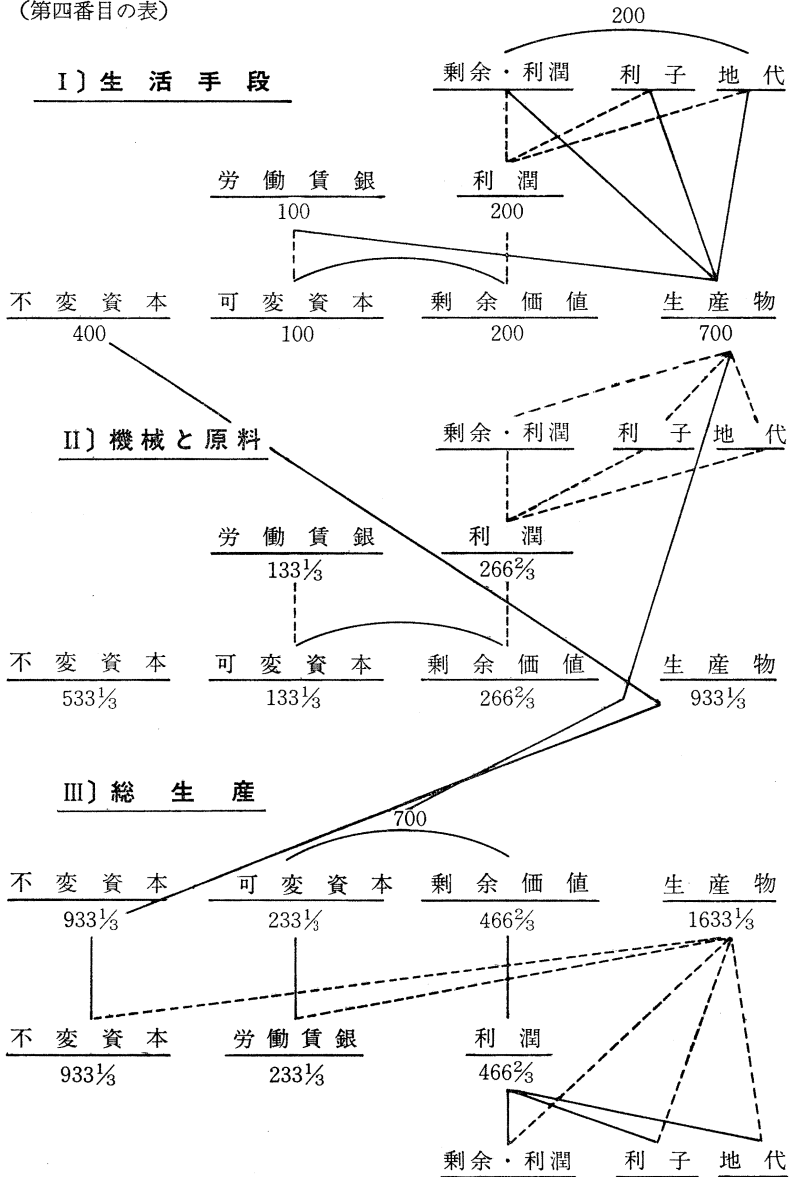
II) 機械と原料



III) 総生産



(第四番目の表)



マルクス経済表の研究



部門Ⅰから生産物 (33%) をうる。そこで同額の貨幣がⅡからⅠへ流れ、Ⅰの資本家がこれでⅡの生産物を買う。Ⅱの資本家への貨幣の還流。Ⅱの諸収入も  $m$  (26%) から支払われ、その取得者たちはⅠから生活手段を買う。Ⅰの資本家はこの貨幣でⅡの生産物を買うので、Ⅱへ貨幣が還流する。こうしてⅡの資本家は、再び賃銀、利子、地代を支払うことができる。結局、Ⅱは合計でⅠから  $V$  と  $m$  に等しい四〇〇 (生活手段) を買い、Ⅰ資本家は、Ⅱから  $C$  に等しい四〇〇の機械や原料を買い、Ⅱへ諸収入に支払った全貨幣が還流する。

部門Ⅲ。Ⅱの総生産物は社会の総不変資本として機能し、Ⅰの総生産物は、一方でⅠとⅡの  $V$ 、他方で両部門での諸収入の総額である。

これらの経済表については、つぎの諸点に注意すべきである。

(1)  $C$  は固定資本と流動資本から成るが、価値が流通に入らない固定資本部分は捨棄されている。資本の一部は貨幣から成り、 $V$  は貨幣資本として存在する。貨幣としての利子と地代は、その取得者の手許に存在する。流通上にある資本家の貨幣額は、実際にそれが機能する分量よりもずっと少い。

(2) 商人資本と貨幣取扱資本を別々に示さないのは、表を複雑化しないためである。

(3) 再生産の規模を不変とするのも、蓄積過程の叙述が基本的運動の純粹な把握を混乱させるからである。

(4) 両部門が表示しているのは、Ⅱの総生産物は社会の  $C$  として現われ、Ⅰのそれは  $V$  および  $m$  として実現されるということである。この点がⅢで示される。

(5) 点線は支出の開始点、流通の出発点を示し、実線はそれがどこへ下降するかを示す。

以上の説明の直後に、「(単純な) 総生産過程の経済表」という記述がある。それは、それまでに描いた諸表 (特に

第三、第四表)をそう名付けたのであろう。ちなみに、七月六日付エンゲルスあての手紙で描かれた表は、わずかな相違を除けば右の第三、第四の表とほとんど同じものであって、「総再生産過程を包括する」<sup>(3)</sup>ものとされている。なお、この手紙でも前述と同様の説明がみられるが、特につぎの諸点に注目すべきであろう。それは、彼の表がケネーの「経済表」の代わりになるものだと いわれている点、説明の冒頭にスミスのいわゆる「VプラスMのドグマ」が批判されていること、経済表は『資本論』第三部の最後の諸章の一つに総括としてのせるものだと指示されている点、各補填運動はそれぞれの資本家に彼らが労賃・利子・地代を支払う貨幣がいかに還流するかを示していると指摘されていること等々である。

## 二

マルクスの説明をみれば、これらの表がなにを描いているかは明瞭である。それは一方では、二部門における年々の総資本(W)が価値と素材の点で補填される基本的な態様であり、他方では、それに応じて行われる——そして価値生産物に対応する収入諸形態を媒介とする——貨幣の還流運動の態様である。部門での「運動は、同時に、どのようにして両部門の各資本家のもとに、彼らが再び新たに労賃・利子・地代を支払うための貨幣が還流するかということを示している」<sup>(4)</sup>。こうした表示によって、スミスのいわゆる「VプラスMのドグマ」が一目瞭然になるのである。以上の基本点は(第一表はやや異なるが)、どの表にも共通した点である。ただ、どの表も少しずつ相違しているの

で、その主だった相違点を簡単に比較しておこう(第四番目の表を第四表と呼ぶ)。

まず、第一表と他の諸表との相違が最も顕著であり、つぎに第一・二表と残り三つの表との違いが目立つ。

第一表が他表にくらべて違う点は、部門Ⅲがないこと、各部門の生産物項目がなく、したがって諸収入と生産物との関連が表示されていないこと、可変資本に対応する労賃の表示がないこと、等であろう。

第一・二表は、残り三表にくらべてつぎの四点で相違している。(イ)前者ではICがⅡVプラスmと点線で結ばれているが、後者では直線で生産物と呼ばれている。(ロ)前者の部門Ⅱは不変資本と表示され、後者のように機械と原料とされていない。(ハ)前者では、部門Ⅱの収入諸形態がⅠの生産物と結ばれていない。(ニ)前者では、投下総不変資本と年間充用不変資本との区分が表示されているが、後者では充用不変資本だけが示されている。

以上の相違にくらべて、残りの三表間の違いはそれほど大きくはない。第三・第四の表を手紙の表とくらべると、前者では部門が総生産、後者では総生産物と示されているとか、前者では部門ⅢのVとmが収入形態に対応させられて生産物と結ばれているのに手紙の表では収入形態は削除されている、という程度の差異といつてよいであろう。<sup>(5)</sup>

(3) ロシア語版『マル・エン全集』第四八巻、一六六ページ。

(4) 『マル・エン全集』第三〇巻、三六二(訳、二八九)ページ。

(5) 以前の拙論(二)では、ノート第二二冊の「経済表」として、アドラツキー版『資本論』に載っている二つの表を紹介した。しかし、今度のロシア語版の諸表をみると、それらは右の二表と少しずつ異っている。編集者が各表を折中したのであるか? 本稿では、ロシア語版の諸表がオリジナルどおりのものと前提して話をすすめることにしたい。

## 第二節 表の成立過程——「エピソード、再生産過程における貨幣の還流運動」

を中心に——

—

副題のごとく「エピソード」に重点をおいたのは、かつての拙論との重複をさげようとしたためである。

さて、表のいわば骨格をなすものを二部門における総資本の補填関係と表現するならば、表の血液循環をなすものは、右の補填関係に対応する貨幣の還流運動だと表現できるであろう。そうだとすれば、表の成立過程の考察は、右の二契機に関する研究の進展を基本にすべきである。

まず、この観点から、研究過程で注目すべき論述部分を一括して表示することにしよう（次ページ参照）。この概括表の上段は、主として総資本の補填関係の研究（スマスのいわゆる「Vプラスmのドグマ」批判）を、下段は主として再生産に関連する貨幣流通・貨幣の還流運動の論述を基本にしている。ただしその論述が上・下段に共通するばあいには便宜的なふり分けをしておいた。各ノートの執筆時期は、ほとんどがマルクスの表記によるが、それ以外の考証は主としてかつての拙論と大谷禎之介氏の考証<sup>6)</sup>によっている。今後、本稿で各ノートの論述にふれるさいにはその時期やページを省略し、概括表に付けた項目番号、たとえば③とか④とか①というかたちだけで指示することにした。なお、執筆時期が二つの年にまたがりうるばあいは、期間の短いと思われる年を丸括弧に入れてある。

『要綱』では社会的総資本の再生産は、固有の課題としてはほとんど扱われていない。不変資本の補填関係について正しい指摘がみられるとはいえず、それがいかに行われるかは多数資本の考察に属するものとされている（概括表◎および拙論『要綱』における再生産論に関する諸論述の検討）△『立教経済学研究』二四卷二号（参照）。この点で興味深いのは、第二部初稿におけるつぎの指摘である。

「現実的な再生産と流通の過程は、多数の諸資本の、種々の産業部門に分裂している総資本の過程としてのみ把握できる。したがって、いままでの考察方法とは違って、この過程は現実的再生産過程として考察しなければならぬ。それは、この部の第三章で行われるであろう」<sup>(7)</sup>。

ここには、『要綱』当時の叙述プランの変更の一端が示されているといえよう。

固有な意味での再生産の最初のまとまった研究は、ノート第六冊—第七冊（一八六二年三月—四月）における不変資本の補填に関する考察——『学説史』でいえば第三章A・スミス、第一〇節「年々の利潤と賃銀が、そのほかに不変資本をも含む年々の商品を買うことがどうして可能か、の研究」——である（概括表◎）。

マルクスはここで、スミスの「第四の部分」（C部分）に関する矛盾した主張をみ、「消費用生産物全体が、すでにそれに入りこんでいた価値成分および生産条件のすべてにどのように分配または分解されるか」<sup>(8)</sup>を追求して、つぎのような結論を引出している。

一、消費用生産物の生産と、それに必要なC部分の生産は同時に並んで行われる。一部のCは総生産物に入るが、価値としても使用価値としても消費用生産物に入らずに現物で補填される（農業、鉱山、炭坑）。一般に、機械生産や本源的生産の部面では現物による相互補填が行われるが、他の部面では行われぬという重要な相違がある。

社会的総資本の再生産と流通に関する研究経過の概括表

年・月  
ノット  
番号

57・12	Gr	(3)	リカードへC部分の看過批判への反論(270-272)②
58・1	(4)	(4)	五部門間での諸交換に関する例表(338-347)②
1	(5)	(5)	諸資本間でのCの相互前提へ多数資本は後へ(416)ラムジー(450-452)②
2	(6)	(6)	④〔6〕貨幣の環流、資本流通と貨幣流通の区分(496,512,515,568-569)
59・	M.	(5)	⑤〔Cr〕還流G—W—GはG—W—G(100-101)
62・3	(5)	(5)	⑥〔6〕重農学派へ流通による再生産の媒介への評価・流通章(222)
3	(6)	(6)	⑦〔6〕C部分の補填の研究へスミス「ドグマ」批判へ流通篇で(255-300)②
4-3	(7)	(7)	⑧〔8〕ガルニエに於るスミスの「ドグマ」(349-357)①
4	(8)	(8)	⑨〔9〕貨幣の還流に関するトランシの誤り(400-406)
4	(8)	(8)	⑩〔10〕ケネー「経済表」貨幣還流運動の研究(422,437)
4	(9)	(9)	⑪〔10-11〕絶対地代の論証(445-492)
4	(9)	(9)	⑫〔9〕資本と収入・資本と資本収入と収入の交換について(373-391)②
5	(10)	(10)	⑬〔10〕ロードベルトゥスに於るスミス「ドグマ」(458-469,478-480)①
5	(10)	(10)	⑭〔10〕同右(515-517)①
7	(11)	(11)	⑮〔12〕リカードに於るスミス「ドグマ」(559-560)②

62・8〔13〕蓄積と拡大再生産の諸条件の考察(ヘリカド蓄積論批判)(694704)①  
8〔14〕部門間の交換・補填(マルサス批判)(67772)②  
10〔14〕単純再生産と拡大再生産での諸交換( $V+R=C$ )(854857)③  
10〔15〕かつての研究(7・9等)——総再生産過程の研究(971)④  
〔15〕  
63・1〔17〕  
〔18〕ラムジの「スミス・ドグマ」批判(1091,1092)⑤  
〔18〕蓄積と拡大再生産に関する指摘(ヘルビヒ、リヒ、シュ、ン)(1110,1115)⑥  
6-5〔22〕独自で詳細な再生産は流通篇(1371)⑦  
〔22〕蓄積と拡大再生産の諸条件の考察(1376-1384)⑧  
〔22〕再生産過程の経済表(1390,1394)  
〔手〕7/6 経済表(第三部の最終的諸章の)⑨  
63〔64〕(稿) 第二部第三章、及び第四部への指示(直接的生産過程の諸結果)⑩  
64〔65〕(稿) 第二部第三章、再生産と流通(第一稿)⑪  
65〔64〕(稿) 再生産表式の利用(第三部第七章)⑫  
65〔64〕(稿) 再生産表式の利用(第三部第七章)⑬  
67・8〔手〕蓄積基金についてEへの手紙(第二部の結びで扱う)⑭  
70・〔稿〕  
77-78〔稿〕第二部用第三稿(第七稿)  
78・〔稿〕第二部用第八稿

〔15〕貨幣の還流運動に関する指摘(893,894,933)  
〔15〕循環諸形式(主として三循環)の考察(901,908)  
〔15〕収入とその源泉・俗流経済学(891,937)  
〔18〕エピソード・再生産過程に於る貨幣の還流運動(1037,1074)  
〔18〕第三部第一〇章、総過程に於る貨幣の還流運動(1139)  
〔稿〕(二部三章初稿)環流運動等は第三部最終章で  
〔稿〕第三部第七章、収入とその源泉

〔稿〕第二部第三章、流通と再生産過程の現時的諸条件(第二稿)

マルクス経済表の研究

二、年間労働の全生産物が収入に分解するということ（A・スミス）は正しくない。しかし、個人消費用の生産物が収入に分解するというのは正しい。付加労働からのみ成り立つ収入は、付加労働と過去の労働から成り立つ右の生産物に支払うことができる。双方の労働から成る別の生産物部分が不変資本だけを補填するからである。

みられるようにここで始めて、二部門分割と再生産の最も基本的な関連がみいだされている〔成立〕<sup>①</sup>。もちろん、それ以前のノートにも不変資本部分の補填に関する簡単なが正しい指摘をみいださる（概括表<sup>④</sup>）。しかしノート第七冊での研究は、「再生産論」の「最も重要な問題」とマルクスが呼んだ不変資本の補填に関する問題を始めて固有のものとして提出し、これを前述のように解決した点で、表や「再生産論」の成立上で出発点をなすものと評価できる。

なお、マルクスはここで、不変資本の再生産の研究を流過程篇で行うという構想を示している（概括表<sup>⑤</sup>）。この構想自身は、これ以降一貫して維持されていく。ただしつぎの文章をみる限り、この時点では、右の問題を主として個別資本の考察として行いう意図がうかがわれようと思われる。「ラムジが二重に考察しているもの、すなわち国全体についての再生産における生産物による生産物の補填と、個々の資本家にとっての価値による価値の補填とは、ともに資本の流過程……のところ、個々の資本そのものについて考察されるべき二つの視点である」<sup>⑥</sup>。

さて、こうした不変資本の再生産の研究は、これ以降多くの面に役立てられながら洗練されていく（概括表<sup>①</sup>—<sup>③</sup>参照）。これらのなかでさしあたり重視すべきものは、ノート第九冊における収入と資本との交換（概括表<sup>④</sup>）、第一三冊におけるリカード蓄積論批判（同表<sup>①</sup>）、第一四冊における単純および拡大再生産（同<sup>②</sup>）、第二二冊、蓄積の諸条件（同<sup>③</sup>）等の論述であろう。



第九冊の考察では諸部門が始めて(A)と(B)に二分割され、(A)での生産物の相互交換・(A)のC部分と(B)の新付加労働部分(Vとm)との交換・(B)におけるCとCとの交換、という三つの基本的関連(再生産における「三大支点」把握のいわば原型といつてよい)が明らかにされている。しかも、これらの関連がその担い手に対応させられ、収入と収入・収入と資本・資本と資本との交換として明らかにされている。

第一三冊の考察は、蓄積における不変資本の補填問題を始めて正面からとりあげ、この点でのリカード批判を行ったものである。ここで、さきの第九冊で未解決になっていた問題——蓄積のさいに剰余価値のVとCとへの転化が、第九冊でみた三つの交換にどう影響するかという問題——が解決されている。

第一四冊の論述は再生産における三大条件を見事に総括したものと見えよう。とくに、部門間の交換が $V_{i+R}$ 、 $W_{i+R}$ 、 $C_{i+R}$ という式で示されていることは、表式的な発想をうかがわせるものとして注目し得る(『成立』①)。

第二二冊には、第一部の蓄積論と錯綜しながら拡大再生産と蓄積に関するより立入った研究がある。たとえば、剰余生産物の異なる消費様式、それと関連する過剰生産、生産と消費との不一致あるいは恐慌の可能性、外国貿易の役割、拡大再生産と蓄積の諸条件、部門間の不均衡等々である。

## 二

貨幣は、現実的再生産過程の外部にあって単にそれを媒介する契機にすぎない。だから、さきにみた不変資本の再生産の研究(主としてノート第七冊)でも貨幣流通の問題は度外視されていた。だが、現実の再生産はつねに貨幣流通をとおしてのみ行われる。そのさいには、同じ貨幣流通が資本の運動や収入の運動をあらわし、現実的諸関連が隠

蔽されることになる。したがって貨幣流通による社会的再生産の媒介の諸問題が解明されないと、資本家的再生産の分析はきわめて不十分なものに終らざるをえない。

他方、こうした考察は、社会的範囲での諸資本の流通の絡み合い、したがってそれらの全体運動という視角を必要とする。ノート第七冊と第九冊でのさきほどの考察も、事実上でこうした視角がみられはしたが、社会的総資本の再生産と流通という独自の視角としていま一つ明確になっていなかった。現実的再生産の基本的条件とその担い手による三つの交換関係を考察したあとで、マルクスの関心は、トラシの検討（概括表下段㊦）を契機に、年々の社会的再生産過程がどのように流通によって媒介されるかを概括しようとするケネー経済表に向けられていったが、それは、彼の再生産過程に関する研究の当然の流れであったと思われる。

ケネー経済表の検討は、ノート第一〇冊に「余論」として挿入されている（概括表㊧）。

ケネーの表では、年々の総生産物がさまざまな貨幣流通をとおしていかに諸階級（農業者・地主・工業者）間に配分・補填されるかが示されている。マルクスは、ケネーの表に即して右の点を明かにしている。しかし、彼の視角は、「表」自体の解釈よりも、むしろ資本主義における社会的再生産過程を媒介する貨幣流通、とくにこの過程における貨幣の独自の機能と貨幣の還流運動に絞られている。

この検討を通じて、始めて二つの貨幣の還流運動が区別された。つまり、資本家間におけるCとCとの交換や、労働者と資本家との交換等にあられる「形式的還流」(G—W—G)と、資本の増殖運動をあらわす還流(G—W—G)との区別と関連である。そしてこの区別をとおして、現実の社会的再生産の外部にあってそれを媒介する流通手段とその前貸という独自の規定が、したがってまた、資本の前貸と貨幣の前貸との区別が明らかにされている。ま

た、事実上で、こうした流通手段を最初に投下（負担）するものは資本家階級であることもとらえられていると思われる。<sup>(10)</sup>

この「余論」でもう一つ注目すべき点は、ケネー表の評価である。マルクスは、ケネーの表が資本家的生産過程を社会的再生産として簡単な一個の図表に総括する試みと評価している。また、貨幣流通を再生産の形態・資本流通の契機ととらえつつ、諸収入の起源、さまざまな交換と流通——資本と資本・収入と資本・生産者と最終消費者・粗生産と製造業等のあいだのそれ——を再生産過程の契機として説こうとする試みだと評価している。こうした試みが、マルクス自身の経済表で実現されたといえるであろう。以上の諸点からすれば、この「余論」におけるケネー「経済表」の検討は、さきに見たノート第七冊における不変資本の補填研究に加えてマルクスの経済表を成立させるもう一つの起点とみることができる。

なお、この「余論」では、どのようにして資本家は彼が流通に投下したよりも多くの貨幣をそこから引出すのか、という問題が未解決なものとして残されている。<sup>(11)</sup> また、社会的再生産を媒介する流通手段を最初に流通に前貸しする階級が資本家だということは、事実上でとらえられているようであるが、彼らが剰余価値・収入を貨幣化する貨幣を自から流通に投下する（負担する）というかたちでは明確につかまれている<sup>(12)</sup>。これらの点は、ノート第一七—一八冊における「エピソード・再生産過程における貨幣の還流運動」ではたされることになる。そこでつぎに、このエピソードをみることにしよう。

## 三

一八六三年一月にかかれたこの「エピソード」は、商業資本や貨幣取扱資本の考察のあいまに挿入されているもので、ノート第一七冊の終りから第一八冊の初めにかけて論述されており（概括表②）、第一七冊の裏表紙には「資本主義的流通における貨幣の還流運動（再生産過程）」というマルクスの記入がある。<sup>(13)</sup>それは、いくつかの問題をふくむかなり錯雑な叙述であるが、内容的にみると四つの部分から成っている。それらの主要な特徴を適当な小見出しをつけて示してみよう（括弧内の漢数字はマルクスがノートにつけたページ数である）。

〔I〕資本家的再生産過程における貨幣の諸規定。商人資本はいかに流通に投じたよりも多くの貨幣をそこから引上げうるか？ 商人資本による貨幣の蓄積（一〇三八—一〇四六）。

〔II〕剰余価値を実現する貨幣はどこからくるか？ 全生産者との交換関係。再生産過程を媒介するのに必要な貨幣（一〇四六—一〇五九）。

〔III〕社会的総資本の再生産と貨幣の還流運動（一〇五九—一〇六四）。

〔VI〕商人資本家階級による社会的再生産の媒介。再生産と貨幣の供給。貨幣資本の蓄積。蓄積用の追加貨幣はどこからくるか？（一〇六五—一〇七四）。

右の見出しからもうかがわれるように、この「エピソード」では貨幣の還流運動が、つぎの四つの面から問題にされている。

第一。「還流」において、どのように出発点のときよりも多くの貨幣が流通から引上げられるのか？ 価値増殖の

機能はすでに解決されているので、ここでの問題は、出発点の貨幣が誰によって前貸されるのか、また社会的再生産において貨幣材料がいかにかに供給されるのかという問題である。それは、さきのケネー「表」の検討で残されていた問題であり、ここで始めて解決されている。<sup>14</sup>『資本論』では、第二部第七章「剰余価値の流通」と同第二〇章「貨幣材料の再生産」がこれにあてられている。

第二。社会的再生産によって規定される還流運動の態様はどのようなものか？ これは第二部第二〇章三、四節で説明されている。

第三。再生産を媒介する貨幣はいかなる規定をうけとるのか？ それは、資本の前貸や還流とどう関連するのか？ この問題は、一方では第二部第二〇章で、他方では第三部五篇で——主として二六、二八、三三の諸章で——扱われている。

第四。還流を媒介する商人資本の役割。第三部四篇がこれにあたる。

さて、以上の四つのうち、第三、第四の問題はこの「エピソード」ではそれほど詳しく扱われていない。再生産における貨幣の供給源泉とその態様、および再生産における「還流」の態様の問題がここでの眼目となっている。そしてこのあとの問題こそ、「経済表」で説かれている貨幣還流の問題にほかならない。そこで、この問題についての論述（既述見出し「Ⅲ」の部分）をみることにしよう。

この部分は「エピソード」で一番まとまりのある論述である。その主要な内容だけを多少とも叙述の順序に即してまとめてみるとつぎのようになる。

まず、二大部門すなわち個人的消費に入る生活手段生産部門（Klasse I）と不変資本（原料その他の固定資本）生産

部門Ⅱ (Klasse Ⅱ) との部門分割、および三価値の区分。事態の本質的把握のために外国貿易は除外し、単純再生産を前提する。剰余価値は利潤・利子・地代の諸収入に分割される。

部門Ⅰ。ここでの年間総生産物は個人的消費に入る。その一部はこの部門の労働者によって買われる。だから、この資本家が可変資本として投下した貨幣は、通貨として還流する。現物で補填されるわずかな部分を除くと、剰余価値にあたる生産物部分は前年度に支払われた利潤・利子・地代によって買われる。こうして前年それらに支払われた通貨もこの資本家に還流する。要するに、Ⅰ部門内部において資本家Aが別の資本家たちから生活手段を買うことは、後者もAから買うのだから、資本家たちは自分たちで自分の剰余価値を貨幣化していることを意味するのである(この把握は、ノート第一〇冊でケネー「表」を検討した時の把握とくらべて一段の発展を示している)。不変資本にあたる部分は部門Ⅱの資本家によって買われ最終的には、機械や原料等として補填される。だから二つの部門間で流通が生ずる。

部門Ⅱ。この部門の生産物は個人的消費に入らない。だからVとmをあらわす生産物部分と、部門ⅠのCにあたる生産物部分との交換が必要である。このさいⅡでVに投下された貨幣は、直接にはこの部門の資本家に還流しない。ここの労働者がⅠの生活手段を買い(Ⅱの労働者からⅠの資本家への貨幣流入)、Ⅰの資本家がⅡの資本家から生産手段を買うという迂回をへて、賃銀用の貨幣が還流するのである。他方、Ⅰの資本家は彼の生産物・Cの一部分を生産手段に転化している。(こうした貨幣の還流は、時計のメカニズムのように行われはしない。だがここで問題なのは本質的運動であって、還流運動のより詳しい媒介は信用制度の篇で明らかにされる)。

部門Ⅱの剰余価値は諸収入に分裂する。この諸収入の受領者によって部門Ⅰから生活手段が買われる(ⅡからⅠの

資本家に貨幣が流入する)。そしてⅠの資本家は、これで彼に必要なCの一部分を買う。こうしてⅡに貨幣が還流する。このばあい、Ⅰにとっては資本の再生産過程がⅡにとつての剰余価値の貨幣化になっている。残る部分はⅡのC部分であるが、これは固定資本の消耗されない部分、つまり年間生産物の価値に入らぬ部分、および固定資本の磨損分と原材料の価値部分から成っている。最初の部分を捨象すると、部門ⅡのC部分はその部門内部で相互に交換され実現される。この過程を媒介する貨幣も、つねにその支出者に還流する。

スミスやトウークらの見解の批判。彼らは、すべての流通は商人間の流通と、商人と消費者間の流通とに區別しうる、前者における商品の価値額は後者におけるそれを超過できない、と主張した。しかしこの主張は、全商品の価値は結局収入に分解するというスミスの誤りに照応した見解であつて、不変資本と不変資本とのあいだの流通を看過したものである。加えてトウークは、商品や貨幣を資本としての商品や貨幣と混同しているし、また資本の流通における貨幣の諸形態を、資本と通貨の區別と混同している。現実的資本の運動——それは再生産の客観的諸契機を内包する——と、銀行に媒介される貨幣資本の流通との區別も必要である。

以上が「エピソード」「Ⅲ」の主要な内容である。要するにこの部分では、二部門間における社会的総資本の二面的補填とそれに応じた貨幣の還流運動の様相が収入諸形態の媒介をふくめて明らかにされており、右の問題に関連するスミスやトウークらの誤りが批判されているのである。

ノート第一〇冊におけるケネー「表」の検討のさいには、貨幣の還流運動はまだケネーの「表」に即して考察されていたが、ここでは社会的総資本の再生産と流通の分析として正面から展開されている。こうした考察は、ノート第七冊以降の総資本の補填研究Ⅱスミスの「ドグマ」批判とケネー「経済表」での貨幣還流運動の検討とが、いわば統

一的に生かされたものといえるであろう。

注目すべき点は、以上の説明がマルクスの経済表の説明内容と一致していることである。前節で示したようにマルクスの経済表でも、年々の総資本の二面的補填と、それに応じた貨幣の還流運動の態様とが、剰余価値の収入諸形態への分裂と収入諸形態の支出を媒介して描かれていた。したがってこの「エピソード」の部分は、マルクスの経済表によって表わされるべき内容を明らかにしたものであり、こうした意味で、経済表成立の直接的土台をなすものとみてよいであろう。

- (6) 『マルクス資本論草稿集(一八六一―一八六三年草稿) 第二分冊』(大月書店)、「成立と来歴」、大谷楨之介氏の執筆。
- (7) ロシヤ語版『マル・エン全集』第四九卷、二八一ページ(マルクスのページ付〔28〕)。
- (8) M.I.S. 117 (訳、一五四ページ)。
- (9) M.I.S. 78 (訳、一〇〇ページ)。
- (10) M.I.S. 318 (訳、四二七ページ)。
- (11) M.I.S. 303 (訳、四〇六ページ)。
- (12) この点に関する指摘は、すでに名和隆央氏の論文「再生産論における貨幣の前貸と還流について」(『立教経済学研究』三 四卷三号、二九三ページ)にみられる。また、貨幣の還流に関する研究経過を考察したものに、宮川彰氏の論文「貨幣還流法則成立史の一断面」(『経済と経済学』四五号)がある。
- (13) ロシヤ語版『マル・エン全集』第四八巻脚注一一八(五〇〇ページ)。
- (14) 「流通に投じられたよりも多くの貨幣がいかにそこから引上げられるか」。この問題はここで始めて解決されている。叙述全体を通じて再三再四この問題がむしかえされ、除々に核心が明確化されて解決が引出されており、苦心の跡がうかがわれる。そのあら筋はつぎのうにとらえることができる。すなわち「I」では、問題への答が、資本家の商品価値を實現すべき貨幣が存在すればよいということに止まっている。「II」では、問題は剰余価値の発生自体ではなく、それがいかに貨幣で流通するか——この貨幣がどこからくるかにあることが示される。そして貨幣を商品Ⅱ金としてみることにより、それが金生産者



から——他部門の商品（剰余価値部分）との交換を通じて供給されることが明らかにされると同時に、流通に最初に貨幣を前貸するものが資本家階級だという点も示される。「IV」では、こうした点が社会的再生産の一環として、より詳しくとらえられつつ、さらに蓄積との関連も問題にされていく。

### 第三節 表の叙述構想とその変更について

#### 一

マルクスは、経済表を『資本論』第三部の「最後の諸章の一つに総括として」利用しようと構想していた（一八六三年七月六日付、エンゲルスへの手紙）。しかし実際にはこの構想は実現されなかった。その理由をさぐるために、第三部「最後の諸章の一つ」とはどのような章かを考えることから始めよう。

六三年一月の第三部叙述プラン（ノート第一八冊一一三九ページ）の後半はつぎのとおりである。

第六章 利潤率低下の法則

第七章 利潤に関する諸学説

第八章 産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本。

第九章 収入とその諸源泉。生産過程と分配過程との関連に関する問題もここで取りあげること。

第一〇章 資本主義的再生産の総過程における貨幣の還流運動（以下では貨幣の還流運動と略記する、概括表④）。

第一章 俗流経済学。

マルクス経済表の研究

## 第二章 むすび。資本と賃労働。

「最後の諸章」といわれていることや各章の内容からみて、ここでは第九章以下を考察すればよいであろう。

これらの章の中心的内容はつぎのようにとらえることができる。

「第九章 収入とその源泉」。このプランが提示される一・二カ月以前に、ノート第一五冊では、同じ主題「挿論・収入とその源泉」の論述が行われている。その論述からみると、この章の中心内容は、現行『資本論』第三部七篇第八章「三位一体的定式」、五二章「分配関係と生産関係」とほぼ同じものとだということがわかる。つまり、収入源泉に関する三位一体的把握を資本関係の神秘化あるいは物神性の発展において批判すること、分配関係が生産関係の裏面だという点からブルジョア経済学を批判することだということがわかる。

「第一〇章 貨幣の還流運動」。このプランとはほぼ同じ表題の論述が前節でみた「エピソード」である。その主要内容は、第一に総生産過程における貨幣の還流運動をとらえること（この問題に関するスミス、トウークらの謬論批判をふくむ）、第二に貨幣の供給源泉と供給態様を明らかにすることであった。

「第一章 俗流経済学」。ノート第一五冊の「挿論 収入とその源泉」では、俗流経済学の批判も一緒に行われている。そこを主たる根拠に考えると、この章は、俗流経済学が三位一体的定式に安住していることの説明・彼らと古典派経済学との比較・利子に反対する俗流社会主義（ブルードンら）の批判・等からなっていると思われる。ちなみに、ブルードン批判は第一章で行うという指摘もこの「挿論」にみられる。<sup>(15)</sup>

「第二章 資本と賃労働」。この章は、五九年の叙述プラン「資本の生産過程」における「賃労働と資本」の一部分が、六三年一月のプラン変更にともない第三部の結びとして生かされたものであろう。つまり、前者（賃労働

働と資本」では、階級闘争を通じた資本、賃労働関係の揚棄の傾向が「基本的矛盾」に基づいて考察されていたので、この点を生かして第三部の結びにしようとしたのであろう。ちなみにこの構想は、現行『資本論』第三部の最終部分の「諸階級」にも生かされているといえる。<sup>(16)</sup>

では、経済表に係わる「最後の諸章の一つ」とは、六三年一月構想における以上の諸章のどれにあたるであろうか？ ところで、こうした問題提起が意味をもちうるのは、同年一月における最終的諸章の構想が経済表構想の時点（同年七月始め）でも基本的には変わっていないとする限りにおいてであるから、まずこの点を解決しておかねばならない。

このさいには、第二部用草稿の初稿が重要な資料になる。この初稿は、それに先立つ第一部用原稿（六三年七月から同年末あるいは六四年前半頃までのもの）完成以後から六四年後半までに書かれた。なお、第三部稿はそれ以降から六五年の暮までに完成されている。<sup>(17)</sup> この第二部用初稿では、第三部の諸章のプランがまえもって示されている。したがって、これらのプランが最後の諸章に関して一月のものとはほぼ同じであれば、当面の問題も解決されるはずである。

そこでこの点を右の初稿にあたってみよう。そこでの指摘をみると、第四章は商人資本と利子生み資本に、第六章は収入とその源泉・俗流経済学批判にあてられていることがわかる。第七章（最終章）についてはつぎのようになっている。<sup>(19)</sup>（括弧しない部分はやや簡略化したもの。「」の数字はマルクスによるページづけ）。

「9」資本家たちは、「剰余価値を先取りするために自己の手中に貨幣をもっていないなくてはならない」、彼はこの貨幣を年間を通じて前貸しなくてはならぬ。彼がこのために五〇〇ターレルを投下するとすれば、それは単に流通手段として支出された後でも流通上にあり、剰余価値の貨幣化として彼に還流する。剰余価値の一部が資本に再転化されるばあい、より多くの貨幣量が要求される限りでは、金生産の増大が必要である。もし金生産が増大しなければ、

貨幣価値が増大するだろう。「われわれは、この点を第三部第七章でもっぱら詳論するであろう」<sup>(20)</sup>（以上、第一章「資本の流通過程」第一節）。

〔93〕「貨幣は固定資本であるか流動資本であるかの考察」では、結果的にまったく同じ貨幣量が貨幣資本と収入という異った機能を果すことが前提されている。「ところで、流通に存在する貨幣の一部は、つねにそれを資本として機能させぬ人の手中にあるということも同様に正しい。他方、貨幣の一部はつねに予備用の資本ではなく、準備用通貨である。われわれはこの問題を第三部第七章でより詳しく考察する」<sup>(21)</sup>（第二章「資本の回転」第二節）。

〔108〕貨幣は現実的再生産過程を媒介するだけでそこに入っていない。だからここでの再生産の考察ではさしあたり貨幣を捨象する。「貨幣流通が考察に入れられるのは、現実的再生産過程自身の研究からこの過程の契機として貨幣流通の特殊な規定が生じてくるばあいのみであろう。より進んだ諸規定は、商人資本等や剰余価値が分裂するさまざまな独自の諸範疇の考察が行われたあとに、第三部の最後の章でのみ考察されるであろう」<sup>(22)</sup>（第三章「再生産と流通」第一節）。

〔149〕「7）再生産過程の攪乱 第三部第七章で考察すべきである」<sup>(23)</sup>。

以上の点をみれば、第三部第七章（最終章）は、社会的再生産における流通手段の前貸しと還流・社会的再生産過程を媒介する貨幣の機能および貨幣流通の独自の諸規定等に関する詳しい考察・さらに右の問題と関連する再生産過程の攪乱の考察・にあてられるべく構想されていたことが明らかになる。その前の第六章が俗流経済学批判に、第四章が商人資本と利子生み資本にあてられていることや右の引用文〔108〕等からみて、第五章はおそらく地代論に予定されたものであろう。第二部初稿に示されたこうした第三部の叙述プランは、これまで明らかにされなかった過渡的

なプランであって、それ以前の六三年一月プランとくらべ、地代論の取扱いや学説史的諸章の削除という重大な変更をふくんでいる。<sup>(24)</sup> また、一月プランにおける「第九章 収入とその源泉」、「第一章 俗流経済学」は第六章へ一括されている。最終章が第七章とされていることからみると、「第二章 むすび 資本と賃労働」が削除されている可能性もありうる。だが、これらの重要な変更がみられる一方、第七章（最終章）は同じく一月プランの「第一章 貨幣の還流運動」とほぼ共通した内容のものでとされており、収入とその源泉・俗流経済学批判がその前の章におかれている。この点は明らかに現行版の構想とは違っている。こうした構想は内容的にみる限りでは、六三年一月プランに近いといつてよい。

経済表を第三部の最後の諸章の一つにおくという構想は六三年七月六日に示されており、第二部初稿に示された第三部プランよりも何カ月も前のものである。したがってこの七月構想もまた、以上の限定を付する限りでは、一月プランにいつそう近いもの、あるいは一月プランと同じものと考えて大過あるまい。

そこで改めて、経済表をのせるべく予定された「最後の諸章の一つ」を一月プランの諸章との対応で考えてみよう。

結論からいえば、「最後の諸章の一つ」に一番あてはまる章は、「第一章 資本主義的生産の総過程における貨幣の還流運動」だと考えられる。なぜなら、なによりもまず、「第一章」とほぼ同じ表題の「エピソード……再生産過程での貨幣の還流運動」の内容（とくに既述「Ⅲ」の部分）が、経済表の説明内容と同じだからである。換言すれば、「第一章」の問題を論ずるためには、再生産過程と貨幣の還流運動に関する経済表的把握が基本にならざるをえないからである。この点で、「第一章」が独立した章としては廃止され、その内容がいくつかの諸章にふり分けられ

たことは、経済表プランの中止と「第一〇章」構想の中止との照応関係を示唆している。他方、「第一章 俗流経済学」と「第一二章 資本と賃労働」の課題なり視角は、経済表のそれとは異っているからである。また「第九章 収入とその源泉」は、スミスの「ドグマ」批判が含まれるばあいには、ある程度あてはまりうる章であろう。しかし、当時この章でスミスの「ドグマ」批判にたちかえる構想はなかったと思われる（ノート第一五冊「挿論 収入とその源泉」参照）。かりにこの批判がとり入れられるようになっていたとしても、ここでの「ドグマ」批判という視角からすれば、貨幣の還流運動の直接的論述は不要であり、経済表まで描く必要性がそれほどあるとも考えられない。ちなみに、現行版『資本論』第三部四九章「収入とその源泉」の「ドグマ」批判においても「還流運動」についてはふれられていない。

以上の推論に大過がないとすれば、経済表の利用目的もほぼ明白であろう。すなわち、その目的は再生産過程における貨幣の還流運動と貨幣の諸規定・貨幣の供給源泉とその態様・これらの問題に関する謬論（トゥーク）等々を究明するばあい、その基礎的説明を与えておくのに利用することにあつたと考えられる。

ただし、六三年七月当時マルクスが経済表をもつばら「第一〇章」におくべきものだとして確定していた、とするのもゆきすぎであろう。もしそこまで確定的に考えていたとすれば、「最後の諸章の一つ」という表現をしなかつただろうからである。当時は「第一部」草稿を書きはじめの直前であり、「第二部」、「第三部」の各諸章に関する最終的構想はまだ完全には確定されていなかったのである。一月プランに応じて経済表を「第一〇章」（あるいはそれに該当する箇所）にほぼ予定しながらも、スミスの「ドグマ」批判がここや他の諸章にまたがっている点などを考慮したりして、とりあえずさきのような表現をとつたとみるのが真実に近いのではないだろうか。

一八六三年一月における「第三部」に関する最後の諸章の叙述プランは、現行『資本論』では、主としてつぎのように変更されている。

1、「第九章 収入とその源泉」、「第一章 俗流経済学」は、第三部第七篇「収入とその源泉」に統一された（ノート第一五冊で、この論述に含まれていた利子生み資本論自体に関する部分は第五篇に移された）。

2、第七篇「収入とその源泉」には、スミスの「ドグマ」批判が右の視角からとり入れられるとともに、ここで始めて再生産表式の利用が行われることになった（「第四九章 生産過程の分析のために」）。

3、「第一〇章 貨幣の還流運動」は、独立した章としては廃止された。再生産過程における貨幣の還流運動の基本的態様と社会的再生産を媒介する流通手段の前貸に関する規定は第二部第三篇二〇章で、銀行によるその媒介やそのさいの貨幣の詳細な諸規定に関する一部分は、第三部第五篇の主として第二章、第二八章、第三三章で、貨幣（金）の供給に関する問題は一部が第二部第二編の一七章、一部が第二部第三編で、それぞれ扱われることになった。

こうした叙述構想の変更は、現行『資本論』以前に構想されていた第二部第三章（編）の内容を現行のようにするという構想——つまり「第一〇章 貨幣の還流運動」の廃止にともない、その内容を第二部第三章（編）に盛込んで充実しようという構想——が成立したことを意味している。

社会的総資本の補填関係の把握は、貨幣流通の媒介、したがってまた、貨幣の還流運動の理解を欠けば極めて不十分なものならざるをえない。他方、後者は前者の理解を基礎にしている。貨幣の供給等の問題も、基本は総資本の

再生産過程の一環をなすものとして扱うのが正しい。したがって、「第一〇章 貨幣の還流運動」の論述は第二部第三章と重複せざるをえない。このことは第二部第三章の初稿をみれば明らかである。「第一〇章」が廃止されたのは、こうした点が考慮されたからだと考えられる。ノート第一七冊における「エピソード 貨幣の還流運動」の研究は、こうした点を認識する土台となるものであった。こういう意味で「エピソード」は、現行第二部第三篇の成立にあって大きな意義をもっていたのである。

経済表が主として「第一〇章 貨幣の還流運動」に利用されるべきものとして構想されていたとすれば、同章の廃止は、そういう構想にとって表の必要性がなくなったことをも意味する。この点で同章プランの中止は、経済表が『資本論』で利用されなかった基礎的な理由だと考えられる。しかし、経済表が『資本論』の他の箇所でも利用されなかった直接の理由は、現行第三部草稿（第七篇第四九章）の執筆中に再生産表式が発見されたことにある。<sup>(25)</sup>

再生産表式は、総資本の二面的補填関係を簡単な二条の数式で統一的に示すものであって、その簡潔さと抽象性のゆえに、再生産過程に関する種々の側面を説くうえで利用範囲が広く有用性が高い。これにくらべて、何本かの線を用いる経済表の方は、質的に異なる相互的諸関連を表示しようとするばあいには、一本の線が面的かつ一方的運動だけを示すという点で不便さをもっている。たとえば経済表では、二部門間の関係は生産手段部門のVとmとを、向上線で生活手段部門の総生産物（七〇〇）に結びつける一方、生活手段部門の四〇〇Cが生産手段部門の総生産物（九三三C）と太い下降線で結ばれるかたちで図示されているが、表式ではこれをI(V+m) || IIと簡潔に示すことができる。さらに表式は単純再生産だけでなく、蓄積をも表示しうるし、貨幣材料の再生産、一年をこえる固定資本の補填、貨幣の還流等を説くにも便利である。



したがって「第一〇章 貨幣の還流運動」構想の廃止にもなつて、第三部七篇四九章の叙述にさいして表式が発見されたことにより、それ以後はもっぱら表式が用いられるようになるのである。

一方で六三年一月プランの「第九章 収入とその源泉」と「第十一章 俗流経済学」とが第七篇に統一され、また「第一〇章」の廃止にもなつて、現行第七篇で収入形態の視角から再生産Ⅱスミス批判が扱われることになつた（第二部第三章の初稿では、総収入と純収入、総収益と純収益との区分がとりあげられ、この区分に関する誤つた把握が批判されているが、この部分も付加された）。そのさいには貨幣の還流運動を含む複雑な図表を利用しなくともよくなったので、ここで経済表や以前の表現  $V_{\text{min}} + R_{\text{II}} + C_{\text{II}}$ （概括表②）、および「第二部第三章」初稿の説明（数字はすでに右の表式と同じになつている）等が下敷きになつて、表式が発見されたと考えられる。このさい経済表は、再生産の諸条件を二条の簡単な数字で図示しつつこれを統一的に説くことに成功したものだといふ点では、表式そのものの発見上で決定的な前進を示すものであり、最重要の契機とみるべきであろう。このことは、経済表から収入諸形態を消去すれば、そのまま表式の骨格があらわれることをみても明らかだと思われる。

なお、既述した叙述プランの変更の時期についてであるが、第三部草稿の執筆を始めるにあつて、あらためて第三部の篇別構成を立てたとき（一八六四年後半から六五年一月）だといふ可能性が大きいと思われる。「第五篇三三章 信用制度下での流通手段」用の草稿では、すでに社会的再生産における資本と貨幣との前貸の基本的区分、貨幣還流の法則について、それを「第二部第三章」で扱う意図が示されている。<sup>(26)</sup>これに対して第三部用草稿の執筆に先立つて書かれた第二部第三章の初稿には、そうした問題を第三部の最終的な章で扱うプランが示されている（注20、22参照）。

## 三

以上の考察からすれば、かつての拙論にはいくつかの反省すべき点があった。

「……『表』が成立した当時（六三年六一七月）には、『二巻三篇』という場所で社会的総資本の再生産過程を固有の課題として分析しようという構想は、まだ明確なかたちをとっていなかったと考えられる。しかし、『表』は『生産過程』を総括的に把握してこれを図示したマルクスの最初の試みであって、ここではすでに、社会的総資本そのものの填補を他の諸契機から独立させて扱うための前提が十分に成熟していることがわかる（……）。それゆえ、『経済表』の成立は、『二巻三篇』を成立させるための決定的契機としての意義をもっていたといえよう」。

この文章は、かつての拙論（『成立』②、一五八ページ）における結論の一つである。しかし、この結論は正しくなかったといわねばならない。

右の文章の前半では、経済表の作製時期（六三年五月―六月）に、再生産の問題を第二部第三章で扱う構想はまだ明確になっていなかったといわれている。しかし、スミスのいわゆる「VプラスMのドグマ」批判を中心に再生産の考察を流通過程篇で行うという構想は始めから一貫しており、また経済表が描かれる以前に、第二部の第一・第二篇にあたる問題もそれぞれ独自の課題と内容をもつものとして把握されていた。<sup>(27)</sup> 再生産の考察については、個別資本の視角とは区分されて「総資本の様々な部分が、相互にいかに価値として実現されるか、またいかに使用価値として補填されるかの考察」<sup>(28)</sup>という現行版と同じ課題設定も示されていた。したがって内容的にみる限り、経済表より以前に（たとえば六三年一月プランのころ）流通過程篇を三章構成にし、第三章で右に引用した再生産の課題を分析しようとい

う構想ができていたとしても少しもおかしくはない。むしろその可能性の方が、経済表成立時期に「構想はまだ明確なかたちをとってなかった」可能性よりも大きいというべきであろう。ちなみに第一部用草稿の一部「直接的生産過程の諸結果」は、経済表よりもあと約数カ月前後の期間に書かれたと思われるが、<sup>(29)</sup>ここにはすでに「第二部第三章」への指示がみられる。

後半部分について。経済表こそが、総資本の再生産を他の契機から独立して扱うための理論的前提を準備した点で、第二部第三篇を成立させる決定的契機になったという結論も正しくなかった。第三篇(章)として独立して扱うべき理論的前提なり視角は表以前に準備されている。この点はくりかえさない。ただ、同じ第二部第三篇(章)といっても、その初稿以前の構想と第二稿にみられるような内容的に充実された構想とは異っている。前者には、貨幣の還流法則や社会的再生産における流通手段前貸の問題、さらに貨幣材料の再生産と補填という「エピソード、第一〇章」での問題がまだ含まれていないのに、後者では含まれている。

したがって問題は、このように充実された内容の現行第二部第三篇(章)成立にとって経済表はどういう意義をもっていたのか、というように提出されるべきであった。換言すれば、それ以前の第二部第三章から現行のそれへの変更にとって経済表構想はどういう意義をもっていたのか、というように立てられるべきであった。以前の拙論では、第三章のこうした二様の内容あるいは二種類の第三章を不明確にしたままで問題を論じていたために、実質的にはあとの第三章を意識しつつ、結果的に、第二部第三篇の成立にとって経済表は決定的意義をもつなどという誤った表現を与えることになったのである。

いずれにしても、現行第二部第三篇成立にとって経済表が決定的意義をもつというのはゆきすぎである。表はたし

かに「エピソード 貨幣の還流運動」(叙述部分Ⅲ)の把握をより簡單明瞭に概括してみせた点で、同第三篇への前進を示している。あるいは同第三篇の成立過程におけるそれまでの到達点の、いわばシンボリックな表現として意義をもつともいってよい。しかし、それは「エピソード」(Ⅲ)を直接の土台としており、理論的内容の点でそこから決定的前進をとげたものとみることはできない。表にそうした意義を与えるならば、「エピソード」の意義が軽視されかねないであろう。

経済表が現行第二部第三篇の成立にとってどういう意義をもつかを問うばあいには、表が再生産表式の発見にとって重要な前進をもたらした点にその答えを求めべきであろう。ノート第一五冊でみた「 $V+R+C$ 」という表現形式はまだ数字を欠如したものであり、しかもそれ以降一度も利用されなかったことからみれば、表式発見のうへでは右の表現形式よりも経済表の方がより重要な意義をもつと考えられるのである。<sup>(30)</sup>

ここで念のために一言注意しておきたい。それは、表式の成立の発見なり利用をいわゆる「表式論」(「再生産論」の成立と混同してはならない)ということである。再生産の諸法則の発見と、この法則をいかに説明するか——図表によるか数式によるかそれともそれらなしに行うか——ということとのあいだには違いがある。前者は法則自体の認識上の問題であり、後者はそれを表現する手段上の問題である。もちろん、法則認識の深まりに照応してその表現も適確になるが、やはりこうした違いがあることも確かである。この点では、往々用いられている「再生産表式分析論」なる表現も本末転倒的な表現といえよう。多種多様な表式(手段)をいくら分析しても、そこから新しい法則が発見できるわけではない。「第二部第三章」初稿で表式が用いられていない事實は、表式利用を欠いても核的な点で「再生産論」が成立しうることを証明しているといつてよい。したがって、「表式による経済表の止揚」とか「経

済表の表式への転化”などという表現も、以上の区別をふまえたうえで用いないと無用の混乱をまねきかねないであろう。

- (15) ノート第一五冊九三五。M. II, S. 512 (訳、六七二ページ)。
- (16) エンゲルス、『資本論』第三部への序言参照。
- (17) 以上の諸考証は、かつての拙論『成立』に加え、主として佐藤金三郎氏の入念な考証(『資本論』第三部原稿について)②、△『思想』五六四号V)によっている。なお、第二部初稿を収載したロシヤ語版『マル・エン全集』第四九巻の注解68をみると、「この初稿は……十中八九、一八六四年の後半から六五年の春までの期間に書かれている」とされている(五〇八ページ)。ただし根拠は示されていない。
- (18) ロシヤ語版『マル・エン全集』第四八巻、二八一—二、二九八、四八〇—一ページ参照。
- (19) 同、四三四ページ。
- (20) 同、二四七—八ページ。
- (21) 同、三九六ページ。
- (22) 同、四一三ページ。
- (23) 同、四九八ページ。
- (24) この点については、すでに拙論「生産と『消費』の矛盾(いわゆる内在的矛盾について)」(『立教経済学研究』三四巻二号、注7)で明らかにしてある。
- (25) 第七篇第九章「生産過程の分析のために」で用いられた表式は、つぎのものであった(佐藤金三郎『思想』一九七〇年一〇月号、七二年学史学会報告レジュメ)。
- $$\text{Klasse I} = \overset{a}{400} + \overset{b}{100} / \overset{c}{+100} = 600$$
- $$\text{Klasse II} = \overset{a}{800} + \overset{b}{200} / \overset{c}{+200} = 1200$$
- (26) K. II, S. 546—547 (訳、六八〇—六八一ページ)。
- (27) この点は、すでに『要綱』当時から事実上で区分があったといえる(拙論『経済学批判要綱』における資本の流通過程)

程」〔立教経済学研究』二三巻第三、第四号〕。さらに、二三冊のノート中ではこの点がいつそうはつきりと把握されている。たとえばノート第一五冊（九〇—一八ページ）では、「資本が流通過程でとる形態」が、貨幣資本・生産資本・商品資本に区別され、さらにそれらの循環形式が個別資本の運動としてとりあげられている。多分、循環の諸形式がとり扱われたのはここが最初であろう。他方、他の諸ノートでは、固定資本と流動資本の諸規定がいつそう正確にとらえられつつ資本の回転の諸問題が検討されている。たとえば「どのように回転は剰余価値に作用するか」の研究は、ノート第一八冊（一一一—一一九）にみられる。

(28) ノート第一七冊一〇三九ページ（ロシア語版第四八巻、一六九ページ）。これと同じ叙述は、同ノートの一〇四八ページにもみられる。「総再生産過程で、さまざまな資本の使用価値と価値が、相互にいかにかに補填し、支払い、かつ実現するかの状態を考察した……」(MEGA, II, 35, Manuscript 1861—1863, Teil 5, S. 1717)。

(29) 前掲注17参照。補足すれば、これが第二部初稿以前のものであることは、初稿で蓄積論を第五章で扱ったという指摘があることからわかる（ロシア語版第四九巻、四七二ページ）。また、このロシア語版注解<sup>(1)</sup>では、それが一八六三年七月から六四年六月のものとされている。

(30) 松尾純氏は、論文「マルクス再生産論の形成過程——諸見解の整理とその問題点」〔経済学雑誌』七二巻二号）や「再生産論の形成とその基本的課題」（同、七四巻一号）で、要旨つぎのような見解をのべられている。

従来まで、経済表は『学説史』における再生産論研究の内容や構想のすべてを総括するものと考えられ、経済表が表式成立の唯一の起点とみなされてきた。しかし、マルクスは、第三部の最終的な章の一つで再生産論を説くために表を作ったのではない。だから、経済表構想を第二部第三篇へ発展していくものと考えることはできない。再生産論の形成過程は、その核心たる不変資本補填の研究の発展を第二部第三篇まで追求していけばよいのであって、その中に経済表を一段階をなすものとして入れる必要はない（前掲第一論文八九—九〇、第二論文八四—八五ページ他参照）。

「経済表が表式成立の唯一の起点という見方」があったと主張されるばあい、表式を、いわゆる「表式論」〔「再生産論」かそれとも表式自体か、いずれの意味でいわれているのだろうか？ 前者のように思われるが、そうであれば（表現の正確さを別にして）正しい指摘だと考えられる。私がかつての拙論で、「第二部第三篇」成立の二様の意味を不明確にしたまま経済表の意義を論じていたという反省も氏の指摘が一契機になっている。氏が、経済表と「再生産論」との区別を明らかにされつ

つ、「再生産論」形成の本筋を不変資本補填の研究の発展に求められる点も正しい。さらに、第三部の最後の章に表をおくという構想は「再生産論」の構想と違ふといわれる点もそのとおりである。しかし、経済表がおかれるはずの「第三部第一〇章 貨幣の還流運動」の諸問題は、その大半が「再生産論」に吸収されている。「第一〇章」プランの廃止・変更がとりもなおさず「二巻三篇」の内容充実になったのである。さらに、表式の発見も経済表を重要な契機にしている。こうした点で経済表や「第一〇章」の構想は、「再生産論」の成立過程をみるうえで不可欠のものといわざるをえない。その形成上での双方の関連を切断し一方を捨象することは、「再生産論」の形成史研究を一面化させてしまふであらう。

#### 第四節 経済表成立の起点をめぐるこれまでの議論について（拙論批判への反論）

—

私はかつて経済表成立の起点を地代論の完成（絶対地代の論証）に求める通説―山田盛太郎氏の見解―を批判し、経済表は総資本の再生産および貨幣還流の態様を主要な内容にしている限り、その起点は地代論完成以前の二研究すなわちスミスの「VプラスMのドグマ」批判<sup>1)</sup>不変資本補填の研究とケネー「経済表」の検討に求めるべきだと主張した（『成立』②第三節。その後、高木彰氏もこの点では私とほぼ同じ主張をされた<sup>2)</sup>）。

この私の主張に対していくつかの批判が示されたが、なかでも矢吹満男氏のそれは、最初のしかも最も有力なものと思われる。そこで本稿の考察をいっそう深める手掛りとして、氏の主張を検討してみることにした（矢吹満男『資本論』成立過程におけるマルクス『経済表』の意義）△『土地制度史学』第六一号▽。

氏による拙論への批判はいくつかの点から行われているが、内容の検討に入るまえにつきの主張に注目されたい。

「山田氏にあつては（水谷らがいう）「起点」としての——引用者）スミス研究の意義はすでに前提されているのであつて、それらを前提しながら何故地代論完成が、マルクス『経済表』の起点でなければならなかつたか」が問題である（前掲論文一一ページ）。

「地代論完成は同時に剰余価値論の窮極的完成を意味するのであつて、……二部門分割と流通の三流れによる総括的把握の形式的関係が、同時に当初の目標であつた『近代ブルジョア社会がわかれている三大階級の経済的生活諸条件』の内容をなすものとして自覚されてくる（同一三ページ）。「……この意味において地代論完成こそがマルクス『経済表』の起点に他ならなかつたのである。この点を無視して、スミス、ケネー研究をマルクス『経済表』へと直結される水谷、高木の両氏は、再生産論の視角が欠如している」（同）。

山田氏にあつてはスミス研究はすでに前提であり、そのうえで地代論完成の起点としての意義が問われているという主張にあつては、言葉のいい替えと論点の移し替えが犯されている。

氏も、スミス研究で「再生産の基礎範疇が確立している」ことや、経済表の「基本的骨格は『スミスのドグマ』批判による不変資本の再生産の研究を通じて形成され」ていることを承認されている（二六ページ）。そうであれば、「再生産論」や経済表成立の起点は地代論完成というよりもスミス研究だといわれるのが事態の正確な表現であろう。私の主張のポイントは正にこの点であつた。そんなことはわかり切つた前提だといわれても、それまではそういう主張がなく地代論完成に起点を求める主張ばかり目についたので、そう主張することにも多少の意味があるかと思つて主張したまでである。これに対して氏は、「起点」を「前提」といい替え、「媒介」（地代論完成）を「起点」と表



現しておいて、問題のポイントを媒介的意義を認めるかどうかの方へ移し替えておられるといわざるをえない。

## 二

矢吹氏は、私のつぎの主張——『再生産の問題』の根幹は、社会的総資本の価値および質料補填の態様にある以上、絶対地代の証明をまたないで地代を剰余価値の一分肢として『一般的に』把握しておくだけでも立派に提起する』(『成立』②一六六ページ)という主張——に対して、「しかし絶対地代の証明をまたないでどうして地代を剰余価値の一分肢として一般的に把握しうるのか？」と切り返えされている(同、一三ページ)。(桜井毅氏もこれとほぼ同じ疑問を私の主張に投げかけられている<sup>(32)</sup>)。

いくつかの事実を再確認しておこう。

一、「学説史」に関するノートや手紙をみれば、ロードベルトウス研究Ⅱ絶対地代論の検討が始められたのは一八六二年六月(ノート第一〇冊)からである(概括表③)。二、「スマイス研究」で「再生産の問題」が固有の課題として提起され、解決されたのはそれ以前の同年四月(ノート第七冊)であり、ケネー「経済表」の検討は五月である。三、二の研究以前につきの認識があった。「剰余価値は、のちに利潤・地代・利子のようなさまざまの収入を形成する、さまざまの形態に分裂する……」(ノート第一冊<sup>33</sup>)。「Aスマイスは、剰余価値そのものを独自の範疇として、それが利潤や地代として受け取る場所の特殊な諸形態から区別しなかった」(ノート第六冊<sup>34</sup>)。なお、ノート第七冊以前における同様の把握は他の箇所にもみられる。四、しかし絶対地代がまだ論証されていない限りでは、剰余価値の地代への転形のメカニズムは十分に説明されず、地代一般も土地所有に基づくものとして論証されていない。

みられるように、マルクスが絶対地代の論証を欠きながらも資本の支払う地代を本質的に剰余価値の一分肢として洞察していた時点で、「再生産の問題」を提出し解決したことは疑いのない事実である。それゆえ、「絶対地代の証明をまたないでどうして地代を剰余価値の一分肢として一般的に把握しうるのか？」という矢吹氏の私への問いが、どうして把握しうるのか、しえぬのは明らかではないか」という含意のものだとすれば、それは右の事実によって論駁されている。

それとも氏は、「地代を『一般的に』把握しておくだけでも」という私の言葉にこだわられたのだろうか？ 私がここで「一般的に」とのべたのは、決して「全面的に」という意味においてはではない。その点は、すぐ前の文章で山田盛太郎氏の「全面的把握」という表現のあいまいさと、その使い方によってはトートロギッシュな論理に落込みかねぬ点を指摘していることからみても明白であろう。ここでの意味は、資本家的地代ならば「どれでも一括して」というほどの意味においてである。しかも表現上での多少のまぎらわしさと、マルクス自身の当時における把握の過渡的性格とを考慮して、この「一般的に」をわざわざ括弧でくくって示しておいたのである。

剰余価値と地代に関する既述の把握の段階において、絶対地代の証明を待たずに「再生産の問題」が提起され解決されえたとする事実は明白である。だからここでの問題は、この事実をどう説明するかということだけであって、絶対地代の証明を欠けば地代を剰余価値の一分肢として把握しうるかどうかにあるのではない。そうだとすれば右の問いに対する答は容易に引出せるはずである。すなわち総生産物の補填問題は、絶対地代の問題よりも抽象的で基礎的な認識レベルにあり、再生産の基本的関連を把えるさいには収入諸形態は剰余価値あるいは利潤として一括して扱われていけばよい、という答もまた容易に引出しうるはずである。だからマルクスも、不変資本の補填問題を始めて正面

から提出したときに、「剰余価値は『利潤』という範疇の下にとらえられることが前提されている。というのは、産業資本家こそが、全剰余価値をのちに誰にまたどこで引渡さねばならないか「は別として」、直接に取得する者だから——である。／われわれは、全剰余価値を利潤と呼ぶことによって、資本家を、第一に創造された全剰余価値を直接に取得する人、第二にこの剰余価値を彼自身と貨幣資本家と土地所有者とに分配する人、とみなすことになる」<sup>(35)</sup>と  
のべ、剰余価値の分肢諸形態を度外視したのである。

### 三

第三部に予定されていた経済表には(第二部の流通篇に予定されていた社会的再生産過程の考察とは違って)、剰余価値の分肢諸形態が含まれている。氏が地代論完成(絶対地代の証明)は経済表成立のかなめだと主張されるのも、この事実が一大根拠になっているといつてよい。そこで、地代論の完成は剰余価値の分裂を表に図示するうえでどう  
いう意義をもっているかを検討しておかねばならない。

この問題には、密接に絡合いながらも区別されるべき二つの側面がある。

I、経済表は結果的にみて、どの研究段階で描かれたのか—それはどれだけの理論的深みで描かれているのか—という問題。

II、経済表はどの程度の研究段階で描きうるのか—たとえば、絶対地代の証明なしに地代を剰余価値の一分肢と捉えておくだけでも可能か—という問題。

第一の側面では、経済表までにえられた全認識(成果)の程度が問われているのに対し、第二の側面では、経済表

を描くのに要求される最小限の認識条件が問われている。

氏が「地代論完成によって（再生産の——水谷）同じ関係が全く新しい理論的意義を帯びてくる」といわれるばあいは、第一の側面をも含めていわれているのではないだろうか？ それはともかく、二つの視角は異っており、経済表に対する地代論完成（絶対地代の証明）の意義という問題にも異った回答がでてこざるをえない。

Iの視角にたてば、地代論の完成もその重要な一契機だという答になるのは自明である。しかし、だからといって、IIの視角からみるばあいにもその完成が不可欠だとはいえない。

経済表で説かれている内容は、二大部門における総資本補填の基本的関連と、収入諸形態や資本の諸交換を通じて貨幣が出発点に還流する仕方様式であった。表が描かれるための認識条件（段階）という問題も、右の内容によって規定されている。すなわち、それは主として、(イ)可変資本が労賃という収入形態をとり、剰余価値が利潤・利子・地代という収入形態をとること、(ロ)総資本の二面的補填の関係、(ハ)総資本の各価値部分の担手からみた諸交換を通じて貨幣が出発点に還流する態様（あるいは再生産過程を媒介する貨幣流通の諸規定と還流の仕方）——、こうした把握があればよい。このばあい、(イ)は絶対地代の証明がまだ行われていない時期の、ノート第七冊までの既述したような認識程度の把握だとしても、(ロ)(ハ)の基本的な把握は可能である。この点は事実で証明されたとおりである。

ただし、経済表が実際に描かれるためにはこれらの把握がある程度まで整理され、統一化されねばならない。いわばそうした発酵期間と酵母が必要だったのであって、その期間は、既述した「起点」にあたる二つの研究から経済表までの期間であり、その主要な酵母は、それらの研究の深化が統一的に生かされた「エピソード 再生産における貨幣の還流運動」であった、といえよう。経済表の成立にとって、最初の二研究（起点）と経済表とをつなぐ重要な環

は、絶対地代の証明ではなくて右の「エピソード」とみるべきである。

#### 四

経済表に関する氏の見解の核心は、経済表が地代にいたる全範疇的规定を総括し、三大階級の社会経済的諸条件を明らかにすることによって第三部をしめくくるべく構想されたものだ、というところにある(一四ページ)。地代論の完成が経済表の成立の起点だという山田氏や矢吹氏の主張も、この認識によっている。なぜなら氏によれば、地代論の完成によって始めて、再生産に関する把握も三大階級の経済的条件の内容をなすものとして自覚されるようになるからである(二三ページ)。

行論からみる限り、経済表に関するこうした主張の根拠を、氏は、経済表が第三部の最終的諸章の一つに総括として予定されていたこと(前掲、マルクスの手紙)、表は諸階級の収入諸形態を含めた総再生産過程を示していること、に求められているように思われる。

しかし、右の事柄から直ちに氏の主張を引出すことはできない。右の事柄と経済表に関する氏の主張とのあいだには、なお事実に基づく論証で埋められるべき懸隔が残されている。

かりに氏のいわれるように、経済表は三大階級の経済的諸条件なり全範疇なりを総括するために全三巻の最後に位置づけられるべきものであったとすれば、この表が描かれていた時点でそういう構想が存在していなくてはならぬはずである。氏は、こうした構想を現行『資本論』第三部の構想としてとらえられている。したがって氏は、つぎのように断定されることになる。「この表が作製された時すでに第三部……の現行資本論の篇別構成は成立しているもの

と理論的に考えねばならない」(一六ページ)。あるいはその時、『総括として』の『経済表』が構想された」(一七ページ)。

しかし、経済表が描かれた時期(六三年五月―六月)には、現行第三部の篇Ⅱ章別構想はまだできていない。同年八月以降に第一部の原稿が仕上げられ、ついで翌年に第二部初稿が書かれた時期でも、現行第三部の篇Ⅱ章別構想とは違った構想が示されていたのである。つまり第二部初稿で示されたプランによれば、第三部の最終章Ⅱ第七章は、再生産過程に関する貨幣流通の特殊的諸規定およびその問題の誤った把握の詳細な考察にあてられるものであったし、第六章は、収入とその源泉・俗流経済学批判にあてられるものと指示されていたのである(前節の一参照)。このように、ここでもまた、氏の主張は事実によって論駁されている。

右の第六章・第七章のプランと、六三年一月の「第九章 収入とその源泉」、「第一〇章 総過程における貨幣の還流運動」のプランとは内容上でほぼ共通している。そして経済表を第三部最終章へおくとする構想は、右の一月プランと第二部用初稿プランの中間期に示されたものである。しかも、「第一〇章 貨幣の還流運動」に予定されたノート第一七冊のこの問題に関する叙述(本稿第二節の三参照)と、経済表の説明部分とは内容的にほとんど同一である。これらの事実からすれば、経済表が、再生産過程における貨幣還流運動(貨幣の供給の諸問題を含む)の態様やそのさいの貨幣の独自の諸規定を考察する章で、その土台として、総再生産過程の基本的説明を与えておくために利用される予定のものであったことは明らかであろう。総括とか総再生産過程という表現も、こうした視角からのものと理解すべきである。また、表に剰余価値の分肢諸形態が含まれているのも、これらを貨幣還流の主要な契機として示しつつ、スマス批判にも役立てようという視点からだと思われる。

氏のばあいには、山田盛太郎氏以来の経済表に関する先験的イメージがまずあつて、そこからものごとを考えていこうとされる思考があるように思われてならない。現行第三部の篇Ⅱ章別構想の成立から経済表が構想されたとか、経済表成立時点には第三部の現行篇別構成が成立しているなどという事実<sup>(36)</sup>に反する主張がうまれさしたる裏付もなしにうまれてくるのも、このためではないだろうか？

- (31) 高木彰「再生産表式の形成過程」〔『経済学会雑誌』二一三、四、三一二、四一〕。
- (32) 宇野弘蔵編『資本論研究』(筑拙書房)Ⅲ、第二部⑩(二二二ページ)。
- (33) ノート第一冊一三ページ。MEGA II-3, 5, S. 26 (前掲『草稿集』4, 二六ページ)。
- (34) ノート第六冊二五四ページ。M. I, S. 53 (訳、六六ページ)。
- (35) ノート第七冊二七二ページ。M. I, S. 79 (訳、一〇二ページ)。
- (36) 矢吹氏は、経済表について第二部第三章が書かれ(そこで表式が発見され)、その後第三部七篇四九章が記述されたといわれている(一八ページ)。これも明らかな事実誤認である。

一九八一、九、三〇

(この拙論は前号用に執筆したが、編集の都合で本号へまわした。)